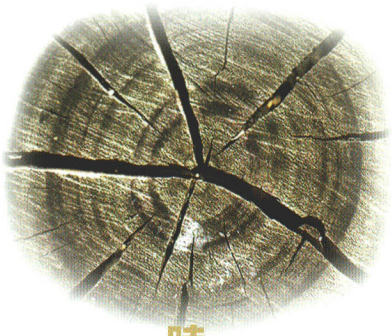

時代とともに生きる神仏

上 浅見川字堀切にある大滝神社と下浅見川字本町にある鹿島神社は、女神さまと男神さまともいわれ、4月8日の祭礼には、両社の神輿が上浅見川字桜田のお旅所で「出会い」、浅見川河口の浜で潮垢離〈しおごり〉をとる浜降りの神事を行います。この神事は、浜下り、お浜降り、潮垢離ともいい、海辺の浜などに期日を定めて神輿渡御を行い、聖なる祭場を設け、神輿が海水に入ったり或いは潮水をふりかけ、後海に対して神輿が遷座し一連の神事を執り行うものです。特色の一つとして、神幸形式即ち神輿渡御が行われることであり、遠く隔った地に浜降りをして禊を行い、神の蘇生、復活即ち神威の高揚を願うところに中心的意義があります。浜に降りる理由は、潮水の持つ浄祓力にその威力、霊力を認めていたからということです。

下 浅見川字桜田にある岩下山朝見寺修行院には、広野町が指定した重要文化財（絵画）である青沼挾山の描いた日本画絵巻物『沿岸図』一巻（長さ6メートル・幅27cm）が保存されています。この絵巻物は、文政8年（1825年）の作といわれ、幕府の異国船打払い令が出され緊迫したなかで、双葉郡富岡町の小浜から、いわき市四倉町新町までの、海上から見た沿岸の状況を描き表わしたものです。この寺の開基、開山は明らかでありませんが、中興開山は鏡海法印と伝えられ、天保8年（1837年）からの過去帳には鏡海法印は永正2年（1505年）寂とあり、それ以前における開創と言えます。江戸時代浜街道沿いに在り、諸国行脚の衆僧が立寄り修行の座についたといわれ、元来は修験僧が住職でしたが、弘化4年（1847年）、第十五世観員僧都の代に僧位を得、以来僧侶が住職となったと伝えられています。本尊は大日如来ですが、寺仏として薬師如来・不動明王・地蔵尊が祀られ、境内には昭和二十八年広野町遺族会によって、日清戦役から第二次大戦までの戦没者の霊を弔った「平和観世音像」が建立されています。

亀 山神社の創建年代は不明ですが、亀ヶ崎新田が延宝3年（1675年）より開発された際、この地の守護神として祀ったと伝えられています。亀山神社の名称については、この地の開発は寛文元年（1661年）、磐城平城主内藤義泰によるとして、その開発と治水を讃えた石碑（通称、風山の碑）が大正3年に社頭に建てられました。この石碑の台座石は亀の形をしていますが、神社名に因むものか、中国や韓国の石碑台座に見られる亀趺（きふ）に由来するものかは不明です。地元では、当社を「山王さま」とも呼んでおり、拝殿にも日吉神社と書かれた幟旗が供えられ、日吉神を祭祀しているのでしょう。社の裏には権現ジャクと呼ばれる切り立った崖が見られ、ここには権現さまが祀られ、この崖下から眼病に効く鉱泉が湧き、眼病によく効くということです。相馬郡鹿島町に鎮座する日吉神社（山王さま）の社地の裏側にも、眼病に効く清水が湧き、以前は目を患うと社務所に泊りながら治療していた例もあり、山王を祭祀していたという伝承や社の立地条件が酷似しています。

亀山神社の祭礼には、旧暦の1月12日に「百矢」・「百矢祭り」・「百矢通し」・「百本通し矢」といわれる弓矢の神事が奉納されますが、現在は1月12日に近い日曜日に行われています。